



依存症に悩む女性の方へ…

依存症は病気です。

薬物・アルコール・ギャンブル・摂食障害

クレプトマニア（万引きが止まらない病気）など…

回復の方法があります。

香川ダルク 女性ハウス

01 目次

02 依存症を理解するために

03 薬物依存症者が自ら命を落とさないために

藍里病院 副院長 精神科医 吉田 精次

05 女性と依存症

新潟県立看護大学 講師 徐 淑子

08 メッセージ

香川ダルク女性ハウス 代表 櫛田 さゆり

09 入寮とは？（入寮案内）

香川ダルク女性ハウスの 1 日
ダルクミーティングの紹介

11 香川ダルク女性ハウス 入寮・通所のご案内

12 香川ダルク女性ハウス 事業案内

13 仲間の体験談

14 家族の体験談

15 家族会へのご案内

16 相談窓口

依存症を理解するために

薬物依存症は病気です。

薬物依存症は、薬がやめたくてもやめられなくなる状態。自分の意志に反して使ってしまう病気です。WHO（世界保健機構）において治療により回復できる病気といわれています。

依存症になる薬とは？

シンナー・覚せい剤・大麻・MDMA などの違法薬物だけではなく、アルコール・睡眠薬・精神安定剤・風邪薬などの市販薬・処方薬でも薬物依存症になることがあります。

どうすれば回復するのか？

薬をやめることは回復の入り口に過ぎません。薬物依存症に陥ると肉体的・精神的な破壊が起こり社会で生きることが難しくなります。

ダルクでは 1 日 3 回のミーティングを中心にプログラムを実践することで少しずつ健康を取り戻し、薬を使わずにはつらつと生きること（回復）を学びます。

ダルクには同じ問題を抱え、ともに回復するために歩んでいる仲間がいます。薬物依存症からの回復には、回復しようとする仲間との出会いが必要不可欠です。

薬物依存症者が自ら命を落とさないために

藍里病院 副院長 精神科医
あいざと依存症研究所 所長
徳島ダルク後援会 会長

よしだ せいじ
吉田 精次

昭和56年、徳島大学医学部卒。現在、藍里病院にて副院長を務めており、薬物依存症のリハビリ施設である「徳島ダルク」の後援会会長も兼任している。平成13年から、アルコール依存症治療を開始。刑務所における薬物離脱教育を6年間担当。平成19年からギャンブル依存症の治療も開始。現在は、依存症全般を専門として治療にあっている。依存症問題に悩む家族のための強力な援助プログラムであるCRAFT（クラフト）を全国に広める活動を行っている。アルコール・薬物問題の予防活動として、「徳島ダルク」のメンバーと共に「アルコール・ドラッグ乱用防止教育」の出前授業を行っている。平成29年より、「あいざと依存症研究所」所長に就任。



わが国における自殺の多さはここで改めて書く必要がないほど、社会的には認知されていることだと思います。しかし、薬物依存症者の自殺について、どれほどのことが知られているのでしょうか。

ここに一つのデータがあります。表をごらんください。薬物依存症者が生きている間に自殺念慮を経験する率は実に8割を越えます。そして、生涯での自殺企図率はなんと5割を越えています。すさまじい現実です。なぜ、これほどまでに薬物依存症者の自殺率が高いのでしょうか。

人を自殺に駆り立てるには次の3つが重要な要因となります。それは所属感の薄さ、負担感の強さ、そして身に付いた自殺潜在能力の3つです。『所属感の薄さ』は文字通り家族や仲間など、自分のことを認めて欲しい、受け入れて欲しいと望んでいる相手や社会から疎外されるという体験と感覚です。『負担感の強さ』は「家族や友人や社会にとって自分は価値がない存在だ、重荷になっている、むしろ自分などいなくなったほうがいいのだ」という感覚です。自分の命を自ら奪うことには根源的な恐怖が伴います。それは本能的なものです。それに抗って自殺を図るためには、この強烈な恐怖に打ち勝たなければなりません。恐怖と痛み慣れること（自傷行為などの習慣化）によって、この危険な『自殺潜在能力』を獲得してしまうのです。この3つ目の要因が最も重大なものです。

薬物に依存することは、単に快楽を求めての結果だという見方はあまりにも表面的すぎます。すでに多くの研究からは、快感を得るというプラスの効果以上に、特に慢性的な薬物使用になればなるほど、嫌な、ネガティブな感情から逃れるという効果のために使用するようになることが明らかになっています。

そして、なにかがあったときには薬物使用が唯一の対処法になっていきます。かつてアルコール依存症のことを「慢性自殺」だと語られたことがありましたが、実は自殺するために使用しているのではなく、今をなんとか生きるために使用している（使用せざるを得ない）という側面が非常に強いのだと思います。ある意味、刹那を生きるこのスキルによって、危険な能力が自分の内に徐々に形作られていくと言えるのかも知れません。

薬物依存症に陥った人が医療に救いを求めてきた時に、他の精神疾患同様に治療と援助を提供しようとする医療機関がどれほどあるか、ご存知でしょうか。極めて限られた数しかわが国には存在しません。公然と「当院では薬物依存症は診ていません」と言われた当事者や家族の証言は無数にあります。薬物使用は孤独な行為です。救いを求め、断られる体験はさらに孤立を深めさせるにちがいません。所属感の弱さと負担感の強さは依存症そのものの属性というよりは、どのような扱いを受けてきたかという2次被害によるものが大きいのではないかと思います。

依存症からの回復に必要なものは「信じる力」です。自分を信じる力、相手を信じる力、回復を信じる力です。それは人と人のつながりの中で生まれるものです。まずは、誰かから理解されようとする、信じようと言われるという経験から生まれてくるのではないかと思います。大切なことは、薬物依存症をできる限り深く理解しようと努力することを怠らず、相手を理解しようとすることを続けていくことだと思います。そして、私たち医療者は回復に必要な援助を可能な限り提供できるよう、さまざまな力を獲得することが必要だと思います。

依存症と自殺

対象者	自殺念慮		自殺企図	
	1年以内経験率	生涯経験率	1年以内経験率	生涯経験率
全国民からランダム抽出	4.0%	19.1%	—	—
健常対照群	2.7%	14.5%	0%	1.8%
病的ギャンプリング群	26.7%	62.1%	12.1%	40.5%
アルコール使用障害者	—	55.1%	—	30.6%
薬物使用障害者	—	83.3%	—	55.7%
大うつ病性エピソード該当者	19.4%	—	8.3%	—

【出典】第2回依存症者に対する医療及び回復支援に関する検討会発言稿の賭博（ギャンブル依存症について）田辺等（北海道立精神保健福祉センター）

女性と依存症

新潟県立看護大学 人間環境科学領域 講師
そう すっちゃん
徐 淑子

1964年東京生まれ。新潟県立看護大学・講師（人間環境科学領域）。津田塾大学、筑波大学大学院で学ぶ。筑波大学より博士（学術）取得。財団法人エイズ予防財団リサーチレジデント、広島大学歯学部助手、日本保健医療行動科学会奨励研究員、財団法人茨城県健康科学センター調査研究部を経て、2002年より新潟県立看護大学勤務。1995年から2006年まで、HIV/AIDSのケア・サポート団体「ふれいす東京」にて、厚生労働科学研究費による調査研究にたずさわる。2013年より女性とアディクション研究会代表。



統計上では、依存症は、自殺の問題と同様、男性に多い問題として現れます。ですが、統計上の大小は比較の問題でしかありません。女性には、男性にはない身体的特性や、社会的役割、生活上の背景がありますので、依存症からの回復でも、男性が体験しないようなたくさんの困難に出会うという事実があります。

たとえば経済的自立と子育ての問題が重なると、かりに依存の問題が落ち着いたとしても、女性はあっというまに追いつめられていきます。日本は、先進国ではまれに見る、就業および収入に男女格差のある社会です。離婚や配偶者の死によって女性のひとり親世帯になると、よほどの蓄えがある人でないかぎり、お金の心配が生活を圧迫するようになります。男性でも、病気のない人でも、多くの人が暮らしの収入確保に大変な思いをしていることを考えれば、依存の問題をもった女性の大変さが、どれだけのものか、想像がつくでしょう。そんな中、依存の再発は十分起こり得ます。

通常、依存症の状態になると、クスリならクスリ、お酒ならお酒が生活の中心になってしまい、自分の身の回りのことすらおろそかになります。ですから、心の中でどんなに子どものことを大切に思っている、子どもの世話まで手が回らなくなってしまう。クスリやお酒の使用が再発しなくとも、苦しさの中で心が混乱してしまうと、何が重要なかわからなくなって、子どもは重荷という気持ちが強くなり、最初はかわいがっていた子どもがだんだん憎らしくなってくるのだってあるでしょう。そんなとき、事情を知らない他人から、自分の子育てを非難されたりしたら、どんなに悲しく悔しいか。

心の余裕のなさから、気分がいつもささくれ立ち、「つきあいにくい人だ」と思われて人から避けられるようになり、自分の方からも人

づきあいを避けるようになると、孤立まであと一歩です。このような状況は、無論、子どもの成長にも大きな影響を及ぼしますし、なんといっても孤立がよくないのです。よい方向への変化が入り込む隙間を閉ざしてしまいます。

生育の過程でつらいことが多かった人は、自分が追いつめられているということに、なかなか気がつかないことがあります。依存の問題を持っている女性の中にも、そのような人がいます。大変な思いをしているときに、優しい声をかけてくれた男性をすっかり信じ切ってしまう、その後、暴力を振るわれるような関係になってしまっても、その関係を「おかしい」と思うことができない。そして、パートナーのことを悪く言う人や、別れるよう言ってくる人をわずらわしく思って、やはり周囲の人と疎遠になってしまう。夫やパートナーも依存症をもっている場合には、女性が自分の回復にじっくり集中できないという問題も起こり得ます。

男性と比較した場合女性に自殺が少ないことに対して、「女性は他人との関係性を築く能力が男性より高いから」であるとか、「他者に助けを求めやすいから」という説明がなされることがあります。しかし、依存の問題がかかっていると、女性であったとしても、他者との風通しのよい交じわりが失われてしまうことがあるのです。

すべてのアディクト女性が、上に書いたような苛烈な生活を送っているというわけではありません。でも、使用していた物質の影響や、逮捕・服役の前歴、その他の要因、さまざまな問題がごちゃごちゃになって苦しくなり、生き方を変えたいと思っても、どこから手をつけていいかわからない。依存の問題をもった人の多くが、このような状態に直面します。

そのような状態になっている女性（あるいは、その家族や友人）が、思い立ったときにすぐに電話できる場所、相談に行ける場所、身を寄せられる場所、自分自身をとりもどす場所、安心して過ごせる場所、再出発のための準備をする場所、回復への道について学ぶ場所が必要です。

そして、頭の中が混乱してなかなかうまく言葉で説明できなくとも、ゆっくり最後まで、偏見や決めつけをせずに、話を聞いてくれる人が必要です。暴言や暴力の心配をせずに、一晩、安心・安全に寝ら

れる場所が必要です。思い込みや誤解があってもそれを他者の目線で整理してしまわず、いったん、それについては留め置くということをしてくれる人が必要です。その上で、目の前の困りごとについて、その大小に関係なく、具体的にどうするか、一緒に考えてくれる人が必要です。

ダルクでは、同じ問題を共有する当事者（『仲間』）たちが、そのようなかかわりが必要な人のために、場所をととのえています。

今、あなたがアディクションの問題で困っているならば、香川ダルク女性ハウスでの入所生活やデイケアの活動を通して、他の『仲間』たちと知り合い、少しずつ、ゆっくり、自分の問題をほぐしていきませんか？そして、アディクションからの「回復」について、『仲間』といっしょに取り組んでいきませんか？



香川ダルク女性ハウス 代表

くしだ
櫛田 さゆり

18歳から30年間摂食障害
30代からギャンブル依存
40代からアルコール依存・処方薬依存のクロスアディクション
長男も薬物依存症
平成25年 11月香川ダルク入寮
平成27年 7月香川ダルク 女性ハウス設立
平成29年 4月一般社団法人 トゥエルブ設立



私がダルクのプログラムに繋がるきっかけになったのは、薬物依存症の息子と薬を止めるには、どうしたらいいのか？と相談に行ったのが始まりでした。

私は機能不全の家庭に育ち、いつも生き辛さを感じていました。そんな時に出会ったのが、父親の痛み止めでした。その後、甘いものに依存し、18歳から摂食障害、アルコール、ギャンブル、処方薬と依存対象を変えてきました。摂食障害とアルコールと処方薬が止められず、気が付いた時には住んでいた家の2階から飛び降りていました。精神科病院にも入院しました。薬物で狂った息子と親子で狂っていました。その結果、家庭は崩壊、自分の居場所をなくしました。

最初相談に行った時、余計に引き込まれて再使用するのではないかと思いました。ところが実際に自分の回復を第一にしてダルクプログラムのミーティングで、自分の正直な話や恥ずかし話をする、薬だけでなく摂食障害、アルコール、ギャンブルも止まっています。ダルクプログラムは、効果があると実感しています。

依存症という同じ病気で苦しむ女性の仲間と共に生きる居場所が必要と感じ、平成 27 年 7 月、香川ダルク女性ハウスを仲間と共に設立しました。現在、女性ハウスでは薬物だけでなく、クレプトマニア（万引きが止まらない病気）、ギャンブル、アルコール、摂食障害の女性の仲間が共に回復しています。かつては依存対象が止まらず毎日少しずつ自殺していた私、現在は仲間達と共に自分を大切にする新しき生き方を練習しています。

ダルクの目的は、依存症という病気で苦しんでいる仲間が、再び社会の有用な一員として、共に生きていく為の手助けをすることだけです。

香川ダルク女性ハウスは、ありのままを認め合いながら、共に生きる居場所を、地域に根ざすことを理念に、これからも活動を続けていきます。

入寮とは？

入寮・通所によるリハビリプログラムの提供

依存症者に共同生活の場と、依存対象を使わない新しい生き方を実践するプログラムを提供することによって、薬物依存からの回復を支援しています。

薬物依存症の他、アルコール依存症、ギャンブル依存症、クレプトマニア（万引きが止まらない病気）、その他の依存症の受け入れも可能です。まずは、ご相談ください。

香川ダルク女性ハウスの一日

7:30 ~ 8:00	起床
8:00 ~ 8:30	朝食
9:30 ~ 10:00	施設内清掃
10:00 ~ 11:00	ダルクミーティング
11:00 ~ 13:00	買い物・昼食・休憩
13:30 ~ 16:00	運動プログラム（ウォーキング） ＊雨天時はダルクミーティング
16:00 ~ 17:00	休憩・筋トレ
17:00 ~ 17:30	夕食の買い物・夕食の下準備
19:00 ~ 20:00	自助グループのミーティング
20:30 ~ 21:30	夕食の準備・夕食
21:30 ~ 22:30	入浴
23:00 ~ 24:00	就寝

●レクリエーション、その他

通常のプログラムに加えて、外食やカラオケ、ボーリングなどのレクリエーションのほか、海遊びやサーフィンなど、季節に合わせたプログラムも実施しています。

また、県外で開催される自助グループのミーティングや大会への参加なども行っています。

ダルクミーティングの紹介

ダルクとは、Drug（薬物）Addiction（嗜癖・病的依存）Rehabilitation（回復）Center（施設）の頭文字を取った造語で、1985年に日本で初めて創られた民間の薬物依存症のリハビリ施設です。現在、北海道から沖縄まで日本全国に約 90 箇所のダルクができています。各ダルクは、地域の特性や文化を活かしたプログラムを取り入れている為、それぞれ個性豊かです。

しかし、どのダルクにも共通して取り入れているプログラムがあります。それが、「**ダルク ミーティング**」です！！

自助グループの回復プログラムに基づいた「ダルク ミーティング」は、全てのダルクが取り組んでいる回復の為に大きな柱です。薬物依存症という病気は、自分ひとりの力で乗り越えることが非常に困難な病気であり、同じ問題を抱えた仲間とプログラムやミーティングを通して楽しみや苦しみ分かち合いながら、回復と希望を見出しています。

ミーティングは、薬物依存症者の自助グループで行っているミーティングに基づいて、文献の読み合わせや、自分自身の体験談を一人ずつ「言っぱなし、聴きっぱなし」のスタイルで行っています。

ミーティングでは、「過去、どうであったか」「現在、どうであるか」「これからどうなりたいか？」について、事実行動（ありのまま）を話します。

ミーティングを通して、自分自身と向き合い、そして同じ悩みを持つ仲間と共に分かち合う事で、新しい生き方を見出していきます。



香川ダルク女性ハウス 入寮・通所のご案内

入寮・通所費

入寮費 1ヶ月……………**¥155,000**
(初月のみ¥170,000)

入寮費内訳	
生活費	1日¥2,000×1ヶ月
家賃負担分	¥41,000
共益費負担分	¥20,000
プログラムケア費	¥32,000

通所費 1日……………**¥5,000**

通所費内訳	
プログラムケア費	¥3,000
食費等	¥2,000

生活保護費の範囲で入寮・通所もできます。体験入寮も行っています。費用のことなど、どんなことでもよいので一人で考えないで一度ダルクにご相談ください。

相談は無料です。電話相談は、24時間対応しています。

香川ダルク女性ハウスへのお問合せ

TEL：090-4783-1463

E-mail：kagawadarc@ybb.ne.jp

香川ダルク女性ハウス 代表 ^{くしだ} 櫛田までご連絡ください。

香川ダルク女性ハウス 事業案内

法務省委託事業 自立準備ホーム

薬物事犯等の刑務所出所者（仮釈放の者を含む）や保護観察中の方に、薬物依存症の治療及び回復のプログラムと、入寮（共同生活）による生活訓練を提供することで、再犯防止を図るだけではなく、社会の有用な一員として自立した生き方が出来るようサポートを行います。

面会メッセージ・裁判における情状証人出廷

刑務所・拘置所、専門病院などへの面会メッセージ活動を行っています。また、医師・弁護士と連携して薬物事犯などの裁判における情状証人出廷を行っています。

薬物乱用防止啓発活動

薬物乱用防止・啓発活動の一環として、医師や弁護士と連携して、学校及び教育機関、行政機関、保護観察所、刑務所、病院等で講演活動を行っています。

毎年12月に、香川ダルクのフォーラムを開催しています。医師や弁護士を中心とした講師講演やダルクの仲間による体験談発表が主な内容です。

相談支援事業と家族会

依存症に悩んでいる当事者、家族、関係者の方からの相談を24時間、受け付けています。相談内容に応じて医療機関や弁護士等と連携し、問題の解決に向けた支援を提供しています。

依存症の問題にお悩みの家族の方には、家族会（自助グループ）や、藍里病院で行っている依存症家族教室「クラフトプログラム」をご紹介しますので、ご相談ください。

仲間の体験談

～ マヤの体験談 ～

私は 14 歳から覚せい剤を使っていました。薬物とセックスとお金に執着して溺れていました。14 歳で初めて覚せい剤を使った日に初めてセックスをしました。薬物と男性に依存してしまうようになったのは同時進行でした。薬物をもらうためにセックスをして薬物を買うためにセックスをしていました。

もっと薬物を使いたいと思った私は売人をしていた人と 17 歳で結婚をしました。子供を二人産みました。子供に愛情を注ぐことが出来ませんでした。子供がおなかを空かせて泣いていても無視して薬物を体に入れて夫とセックスをしていました。愛せない子供と暴力的な夫と薬物でボロボロでした。自分勝手な行動の結果なのに自分が、こんなに不幸なのは母のせいだと思っていました。

私は幼いころから家族と関係性が築けなくて薬物に逃げる 14 歳まで苦しみました。20 歳で離婚をしました。その時に間に入ってくれた人がいて初めて信頼できる大人の男性と出会いました。子供を大キライな母に預けて、その人と知らない街で薬物を売り、悪いことばかりしていました。色んな薬物と出会い、ますます薬物に溺れていきました。

その後、3 回逮捕され 2 回、刑務所に行きました。3 回目に逮捕された時は子供の高校の入学式で、そんなことも分かっていなくて信頼していた人に電話で「死にたいです、殺してください。」みたいなことを言って通報されて刑務所に行きました。

出所して施設に繋がりました。自分が落ち目だったということに気付かず次こそもっとお金を作ることができると思い込んでいました。落ち目だったということを感じさせてくれたのは先行く仲間でした。

良いことも悪いことも教えてくれる先行く仲間を信頼するようになり、女性の代表から新しい生き方という言葉聞いて、自分もそうしたいと思い現在、施設でかつての自分の考えを手放す努力をしています。

薬物で苦しんできた仲間と一緒に、薬物を使わない選択をし続けて、まだ苦しんでいる女性の仲間と回復していきたいです。

家族の体験談

～ 家族会メリーゲート メンバーの体験談 ～

娘は 24 歳。4 年ほど前に覚せい剤使用を私は知った。どうしていいのかわからず、気が付いたら娘を四六時中見張っていた。警察＝社会復帰できないと思っていた私は、使用後の注射針をハンマーで叩き割り証拠隠滅の手伝いをしたり、交際していた彼がきっかけだったので二人を別れさせるあらゆる手段も尽くした。

私が手を出せば出す程、状況は悪化し、遂に私の元から姿を消した娘。それでも私は娘の居場所を突き止めるのに必死だった。狂ってしまっている私を見て元警察官だった友人の父は、「娘を廃人にさせたくなければ警察に行け」と提案してくれた。どうにもならなくなった私はその通りにした。

三か月後、娘は彼と共に逮捕された。元々、「ダルク」の事を知っていた私は直ぐに相談した。村上さん、櫛田さんに出会い“共依存”という病気も知った。「お母さんは自分の事をしてください」「楽しんでください」という提案も最初は意味がわからなかった。まさに私は共依存だったのだ。

疑問だらけだったが提案に従うことにした。住む所、職場も変え全てをリセットした。家族会にも参加した。ミーティングに通ううちに、今まで娘によかれと思ってしていた事が、(娘の自立)娘のためになっていなかったことに気がついた。

参加し続けて 2 ヶ月経った時、初犯だった娘は釈放された。私は電話で「ダルクに行くか？一人で生活するか？」と言い渡した。一人で生活する事を選択した娘は、あれから四年、身内に一切頼らず一人で生活している。私にはできないことかもしれない。

最近になってやっとわかってきた。親子の愛は、色んな形があるのだと…。私は娘を信頼し、手を放して見守る愛の形を選択し、日々生活している。時々、娘に会いたくなり涙を流す日もあるが、湧いてくる感情を受け止め、仲間と笑ってもらうことで気持ちがすっきりする。私にとって仲間は本当に大切だ。

“笑う門には福来る”仲間と共に、これからも苦しんでいる家族が笑顔になれるよう一緒に回復していきたい。

娘の回復、そして仲間の回復を祈ります。

家族会へのご案内 家族会 メリーゲート

依存症の問題にお悩みの家族の方へ…

メリーゲートの特徴

薬物依存症リハビリ施設 香川ダルクとの繋がり

メリーゲートは、発足時より香川県唯一の薬物依存症リハビリ施設「香川ダルク」と、回復の歩みを共にしてきました。香川ダルクによる家族相談はもちろんの事、依存症などの病気を抱えている当事者を香川ダルクに繋げる事も可能です。

依存症専門医師 藍里病院 副院長 吉田 精次医師による依存症家族勉強会への参加

毎月、第4土曜日に藍里病院で、吉田精次医師による依存症家族勉強会に参加しています。クラフトプログラムの学習も行っています。

- 会場／社会医療法人 あいざと会 藍里病院 新館 3F 会議室（AM10:00～AM11:30）
- 住所／徳島県板野郡上板町佐藤塚字東 288-3

ミーティング案内

グループ	開催日・時間	会場・住所
香川	毎週土曜日 13:00～15:00	かがわ総合リハビリテーションセンター 香川県高松市田村町 1114 番地
丸亀	毎月第1日曜日 13:15～15:15	カトリック丸亀教会 香川県丸亀市幸町 2-6-28
徳島	毎月第4土曜日 13:00～14:00	藍里病院 徳島県板野郡上板町佐藤塚字東 288-3
松山	毎月第2もしくは第3土曜日 13:00～15:00	カトリック松山教会 愛媛県松山市三番町 4 丁目 5-5

諸事情により日程及び会場が変更となる場合があります。
以下の連絡先にお問い合わせください。

家族会 メリーゲート

TEL : 090-9450-7173

E-mail : admire12step@yahoo.co.jp

* 秘密は厳守いたします。安心してご相談・お問合せ下さい。

相談窓口

一人で悩まず、共に解決の糸口を探しましょう!

DARC（ダルク）とは、「薬物依存」「アルコール依存」「ギャンブル依存」「クレプトマニア（万引きが止まらない病気）」「摂食障害」などの、「依存症」から回復する為の専門施設です。入寮・通所でのリハビリプログラムを提供しています。

子どもやパートナー、家族が依存症かもと感じているあなた、今すぐご連絡ください。専門スタッフが対応しますので、一人で悩まずに以下の連絡先へお電話、またはメールにてお問合せ下さい。

* 香川県外にお住まいの方へのご相談、女性ハウス入寮にも対応しています。

ご相談の内容や個人情報等、秘密は厳守いたしますのでご安心ください。

香川ダルク女性ハウス 相談窓口

TEL : 090-4783-1463（代表 ^{くしだ} 櫛田）

E-mail : kagawadarc@ybb.ne.jp

HP : <https://www4.hp-ez.com/hp/kagawa-jyoseihouse>

香川ダルク女性ハウス

検索

* 香川ダルク女性ハウスは、個人情報の保護及び安全面への配慮から、住所を非公開としています。

この冊子は、令和元年度香川県地域自殺対策強化事業費の補助を受けて作成しています。

